若手保育者の成長過程および職業継続要因に関する基礎的研究
―就職5年目の追跡面接調査から―

高澤健司（福山市立大学）

キーワード：保育者，職業継続，半構造化面接

問題と目的

保育所や幼稚園には多様な専門性をもつ職員が協働して，子どもたちの生活と発達を保証する場となるべく日々努力を重ねている。その一方で,若手保育者の離職が多いとされ，その危機に対する克服や成長に関する研究は多くない。高澤ら（2017）では初任保育所保育士を中心に，保育者としての成長過程の基本的な道筋を明らかにすることを目的にインタビュー調査をなった。その結果，臨機応変な対応を求められることが保育の特徴であり，保育の面白さであることが示された。また，高澤ら(2019)では継続して3年目の保育者を対象にインタビュー調査を行い，職務継続要因について検討し，消極的職業継続要因と，積極的職業継続要因が見られることが示された。

今回はさらに継続して就職5年目の保育者を対象にインタビュー調査を行い，保育者としての成長の認識と，離職を考えたことがあるか,あるとすればそれをどのように克服し，その要因にはどのようなものがあるかについて検討することを目的とする。

方　法

調査協力者　四年制大学を卒業した中国地方の若手保育者2名（女性2名，就職5年目）。
実施時期　2019年12月および2020年1月
実施場所　調査者所属大学の教室
調査内容　現在の仕事内容や職場における研修，保育の仕事に関する成長と大学での学びと結びついていること，ワークライフバランス，保育の仕事におけるやりがい，保育の面白さについて気づいたことなどについて半構造化面接で行った。
倫理的配慮　調査内容を調査協力者に確認し，参加承諾書に署名をしてもらった。また，調査協力者の許可を得てICレコーダにて録音を行った。さらに，調査協力者に発表内容を確認してもらった。

結果と考察

まず,就職5年目における保育の仕事に関する成長と大学での学びとの結びつきについて検討する。Aさんからは,「5年目になってこうしたい保育について考えられるようになった」「うまくいった経験が自信につながっているが，横のつながりが少ないので，大学の同期と話すことで自信について確認することがある」といった発話がみられた。Bさんからは,「大学で学んだことが現場で『そういうことか』と照会することがある」「子どもの行動には理由があり，その行動から子どもの気持ちを考えることができるのは心理学の学びが活かされている」という発話が見られた。これらのことから，5年目頃から大学における学びと結びつけられつつ，自分なりの保育感が醸成されることが示唆された。

ワークライフバランスでは,Aさんから「複数で担任をもつことで仕事量が減ってきた」「休暇をとるタイミングがわかるようになってきた」といった発話が見られ，Bさんからは「要領がつかめて，お願いできるものはお願いできるようになったことで，持ち帰り仕事などが減った」「前よりは（仕事とプライベートの）切り替えができるようになった」といった発話がみられた。経験年数を重ねることによって生活時間の見通しを立てることができるようになってくることが示された。

保育の仕事を辞めたいと思ったことはあるかという質問に対しては，2名とも明確に辞めようと思ったことはないが，辞めたいと思ったことはあるという回答が見られた。Aさんは，休暇を自由に取ることが難しいことをあげ，Bさんは自分が行っている保育と子どもがかみ合わず，うまく保育を進めることができない時，保護者対応が難しくなった時に辞めたいと思うことがあったとのことであった。これらの困難の解決については，共通して職員や友人同士で愚痴を言い合うといった他者との共有があげられた。

以上のことから，就職5年目においては，仕事に対する自信がついてきており，自分の仕事に対する見通しが出てくることで保育の仕事を続けることができる要因と考えられることがしめされた。その一方で，不満や不安を他者と共有することが重要であることが認められたことから，仕事に関するストレスを一人で抱え込ませない環境が職務継続に対して重要であることが示唆された。